利他主義・ボランティア・宗教：イギリスにおけるチャリティ

稲場　圭信

はじめに

肌寒いある夜，ロンドンの中心地区の一部であるストランドをジーザス・アーミーというキリスト教団体の信者と一緒に私は歩いていた。このストランドに位置するロンドンで最高級のホテルのひとつ「サヴォイ」。このサヴォイのテムズ河に面した側にあるエントランスから20メートルも離れないところにホームレスのコミュニティがある。ダンボールで作られた風除けが雑然と並ぶ彼らのコミュニティ。20～30人はいるだろうか。薄暗く，正直言って私は恐怖を感じた。かつては貴族の社交の場であったサヴォイ劇場とサヴォイホテル。今でもその威厳は残っている。そして，そのすぐそばのホームレスのコミュニティはストランドのストリートとは逆側に位置し，旅行者でなくともその存在に気がつかない。なんというコントラストであろうか。ダンボールや毛布にくるまった彼らは私に様々な視線を向ける。何者が来たのかと鋭い眼差しを向ける者。すべてに興味を失い，まったく一風景のように私を見る初老。じろじろと見る青年。持ってはいけない先入観や偏見が私を襲う。しかし，ジーザス・アーミーの信者は臆することなくホームレスに話しかけている。「食事の用意があるから，あとでトラファルガー・スクエアーに来るといい」30分ほどホームレスたちと話し，彼らは別の場所へ移動し始めた。

トラファルガー・スクエアーという大広場に近い英国国教会の教会前に二階建てのバスと数台のバンで拠点を設け，ホームレスにあたたかい食事とコーヒーや紅茶をサービスする。これは，EDP（eat, drink and pray）と呼ばれる彼らの宗教活動のひとつである。このジーザス・アーミーのホームレスへの施しをどのように理解するか。リクルートのためであるという解釈は彼らへの内在的理解をまったく排除した一面的な見方である。それでは信仰にもとづいた純粋な利他愛のあらわれか。これも非常にナイーヴな解釈である。

日本では1998年，民間の非営利団体に法人格を与え，活動を支援することを目的とした「特定非営利活動促進法（ＮＰＯ法）」が施行された。税制面でのメリットが少ないことや，重要事項の決定が会員総会で行うよう義務づけられていることが緊急活動の妨げになると心配する声もあるが，趨勢は制度的にボランタリー活動がサポートされる方向に進んでいる。環境汚染・ゴミ公害・飢餓・紛争・高齢福祉・ホームレス・アルコールや麻薬中毒など様々な問題を抱える現代社会への行政主導ではないあらたな対応の仕方がボランタリー活動であると位置付けることもできるであろう。宗教団体によるボランタリー活動も近年とくに盛んになり，組織的にサポートしている場合もある。1995年1月17日の阪神淡路大震災の直後から，多くの宗教団体が緊急支援のボラン

タリー活動を展開した。これ見よがしの教団がなかったわけではないが，多くの教団が陰徳として目立たないように，しかし，地道で信頼できるボランタリー活動を行った（国際宗教研究所編 1996)。かれらのボランタリー活動を売名行為やあらたな信者獲得のための活動と解釈することはかなりの曲解であると言わざるを得ない。それでは，宗教とチャリティ・ボランタリー活動の関係をどのように理解したらよいのだろうか。

本稿では，August Comte が提示した分析概念である altruism 利他主義（あるいは愛他主義）についての研究を検討し，ボランティアの社会性やイギリスにおけるチャリティについて概観する。そして，宗教とボランティアと利他主義を日本の状況にも言及しながら様々な観点から検討する。筆者は日本とイギリス両国においてボランタリー活動に参加し，イギリスにおいては２つの宗教団体に対して長期にわたる参与観察・インタビュー・質問紙調査を行っている。体験的調査の方法論については別稿に譲らねばならないが，本稿は上記のような実践と体験的調査を素材の一部として重視した論考であり，ボランタリー活動の社会的意義と信者にとっての宗教的意味受容を考察し，さらに宗教者によるチャリティ・ボランタリー活動の特徴を明らかにしてみたい。

１．利他主義[1]

自己の利益ではなく，時には自己を犠牲にしてまでも他者のために起こす行動や他者を思いやる態度を考察する分析概念として，フランスの社会学者 August Comte（1798 - 1857）は altruism という語を造った[2]。altruism はこれまで「愛他主義」と訳されることが多かったが，近年，哲学や思想分野だけでなく，動物行動学や遺伝子学などの諸分野で「利他主義」という語が使用されている。「利他」は元来，他者を思いやり，自己の善行の功徳によって他者を救済につとめることを意味する仏教用語である。しかし，Comte（1975 : 556）が，altruism と egoism は一個人の中に存在し，両極端に位置する動機であると定義したことを想起すると，egoism 利己主義の対概念である altruism の訳語は「愛他主義」よりも「利他主義」のほうが相応しいと筆者は考える。

他者を助ける行為においても自らの利益をもとめる衝動が存在することを Comte は認めていた (Batson 1991 : 5)。そのような自らの利益をもとめる衝動を egoism と呼び，他者の幸福のために没我的心遣いをする態度を altruism と Comte は呼んだのである (Wispe 1978 : 304)。利己主義を義務論的に個人の善を目的とした行動義務と解釈したり，人間の本性が自己の利益だけを追求するようにできていると捉え，利己主義を擁護する立場もある。しかし，人間の持つ利他的性向を完全に否定することは社会的事実に反する。また一方で，「他者の幸福のために没我的心遣いをする態度」という分析概念としての Comte の利他主義の定義は，あまりにも純粋すぎて現実社会の考察には適さないという指摘がある (cf . Nagel 1970)。

利他主義という言葉の歴史は浅いが，利他主義と利己主義が意味するところの人間の性向は古くから論じられている。そこには大きくわけて３つの見解が存在する (cf . Rushton & Sorrentino (eds) 1981)。ひとつは，Machiavelli（1469 - 1527），Hobbes（1588 - 1679），Freud（1856 - 1939）たちの社会思想の出発点となっている人間性悪説である。ふたつ目は，人間は本来的には善であるが，社会的条件により変容するという見解である。Rouseeau（1712 - 1778），Maslow（1908 - 1970）らがこの見解を持っていた。３番目は，Locke（1632 - 1704），Marx（1818 - 1883），行動主義の Watson（1878 - 1958），新行動主義の Skinner（1904 - 1990）らに代表され

る人間は本来的には善でも悪でもないという見解である。Allport (1897 - 1967) や Kohlberg (1927 - 1987) らによって道徳性発達理論が展開され，近年の研究では Rushton(1980 : 10) が，利他主義は社会生活によって学ぶことができるという研究結果を数多く提示している。

利他主義の内的要因として，自己満足，自尊心，罪の意識からの解放など様々な功利的動機の有無が指摘される (cf . Nagel 1970)。しかし，Macaulay，Berkowitz(1970 : 3) は，利他主義を「他者を利するための外的な見返りを予期しない行動」と定義している。この定義に対し，Rushton(1980 : 10) は，「内的な要因を含まない純粋な利他主義が存在するか否かというような不毛な議論を避けることができる」と積極的に評価している。さらに具体的に Montada，Bierhoff (1991 : 18) は，「他者の緊急事態，困窮，不利な状況の解決，あるいは改善を目的とした行動で，自分自身の利益の達成が主たる目的でない行動」と定義し，「その行動は自発的に行われるものであり，外的力や契約によって強いられたり，促されたり，義務づけられたりしてはいけない」と補足している。これは Comte のモデル化された利他主義の定義に対し，現実対象を設定しての実証研究により相応しい定義と言えよう[3]。

歴史的に，利他主義に対する実証主義的アプローチ，特に心理学的アプローチでは，「何故，そして，いかなる状況下で人は他のために自らの命を投げ出すのか。いつ，いかなる状況下で人は困っている人に手を差し伸べるのか。いかなる状況下で人はより利他的になるのか」というような研究が主であった (Neal 1982 : 7 , cf. Wispe 1978 , Rushton 1980)[4]。困難な状況にある人への共感や感情移入が利他的行動の動機であるという仮説 (the empathy-altruism hypothesis) に関する論文は多数存在する。また他人や敵対者に対してよりも親戚や友人に対してより共感を覚えるということは様々な研究結果によって確証されている (Montada & Bierhoff 1991 : 4)。一方で，社会的規範への志向性が利他的行動の源泉となることも指摘されている。しかし，このような仮説が，近い関係にある人に対しては共感が，そうでない場合には社会的規範への志向性が利他的行動の動機であるというような単純な二分化をしているわけではない。ナチスによるユダヤ人虐殺に際し，危険を冒して救済活動をした人たちが共感にもとづいていたり，親戚への腎臓提供者が道徳的義務によって行う場合もあるからである (cf. Montada & Bierhoff 1991 : 5)。

以上のような利他主義の具体的で継続的な行為としてボランタリー活動があげられる。次にボランティアについて考察する。

2．ボランティア

現代社会は様々な問題を抱えている。自然破壊，環境汚染，ゴミ公害，国際紛争，経済問題，福祉問題，人口問題，食糧問題，教育問題，政治腐敗など枚挙に暇がない。また価値観の多様化にともなう倫理観の変化によって人心は荒廃していると指摘される。しかし，このような時代に対応して人々の問題意識の高まりも見られる。欧米ではボランタリー組織や制度がはやくから整備されているが，日本でもここ数年大きな書店では「社会福祉コーナー」「ボランティアコーナー」「自然環境コーナー」などが設置されている。特にボランティアや福祉関係の本は驚くほど多い。その数が数百冊にのぼる書店も珍しくない。1998 年，ボランタリー組織の活動を支援すること目的とした「特定非営利活動促進法 (NPO 法)」が施行された。阪神淡路大震災後，筆者は宗教と関係がない非政府団体 (NGO) を数人のボランティアとともに立ち上げ，避難所でボランタリー

活動を行った[5]。これは災害救援のボランタリー活動である。しかし，災害救援の活動は非常に特殊なボランタリー活動のひとつであり，他にも地域社会でのリサイクルや清掃など日常的に行われる多数のボランタリー活動が存在する。むしろそのような地味なボランタリー活動にこそ地域社会に根ざした自発的なボランティアの醍醐味があると言えよう。イギリスではボランタリー活動の分野が下記のように分類されている。

スポーツ関連 Sports and exercise
健康・医療と社会福祉 Health and social welfare
子供の教育関連 Children's Education / schools
宗教 Religion
青少年（学校以外） Youth / children , outside school
趣味・文化 Hobbies / recreation / arts
高齢者 The elderly
地域関係 Local community / neighbourhood groups
市民団体 Citizens' groups

(The 1991 National Survey of Voluntary Activity in the UK)

ボランティア volunteer の語源はラテン語 voluntas(will 意思) であり，ボランティアとは自発性にもとづいた個人や精神を意味するものであるが，ボランタリー活動が利己主義とは馴染まない社会活動であるということを強調しておきたい。ボランティアを支える思想である個人主義は他者への配慮をともなった個性化である。個性化は他者との差異化により生じ，その差異化は集団へのコミットメントという社会性があってはじめて形成される。従って，本質的にボランタリー活動は公共性とその公共性に埋没しない個々人の自発性という両面をもっている。ボランティアが個人的な趣味や自己利益と結びつけて論じられることがあるが，それをことさらに強調することは現実を無視した，あるいはボランタリー活動の経験がほとんどない者の観念論的な言説である。ボランタリー活動に多少なりとも参加したことがある人ならば，きっかけや動機が自己利益のためや個人的な趣味であったとしても，活動に関わるうちにそのような個人的な希求を中心に活動を展開することなどは事実上不可能であることを実体験として理解している。パラドキシカルではあるが，むしろ個人の自発性やニーズと他者のそれとの出会い，折衝，調和というようなプロセスを体験することが，個人的で自発的なボランタリー活動がもたらす重要な産物と言えよう。

ボランティアは概念的に自由競争関係を生むリベラリズムと連帯を生むコミュニタリアニズムの二面性を包含する。しかし，ボランタリー活動の根底には，個人的な自発性や主体性による行為が競争ではなく連帯を生むという利他的な公共善の考え方が強く存在する。歴史的にボランタリー活動に影響を与えた公共善の考え方は Thomas Hill Green (1836 − 1882) によるところが大きい[6]。オックスフォード大学ヘーゲル学派哲学教授であった Green は，人間の本性が善を志向し，公共への奉仕を通して人格の完成に至ると考え，そのような個人によって構成される国家の法は個人の公共への奉仕という利他的な公共善の理念を内在するべきであると考えたのである[7]。この思想は後述する 19 世紀後半のチャリティ制度に影響を与えている。

「volunteer 人」「volunteering 動機」「voluntary activity 行為」「voluntary organisa-

tions 組織」というような英語が存在するが，ボランタリー組織はまさに公共善の思想を背景にした社会システムの中心的存在である。それは，伝統的共同体ゲマインシャフトでも選択意志にもとづくゲゼルシャフトでもない，両者の統合としてのゆるやかなゲノッセンシャフト，あるいはゆるやかな連帯と規定できるのではないだろうか。啓蒙主義を経て西欧近代合理主義が打ち出した自立した個人という理想主義は，ゲマインシャフトから放り出された不安定な個人を作り出し，競争社会，高度情報化社会，大衆消費社会というような目に見えにくい社会システムに個人を拘束しつつ，不安定なアノミー状況を生み出した。個人は目に見えるつながり，実体観をともなった生活基盤を希求している。行政主導ではない市民によるボランタリー活動はそのような希求の現代的な表現形態とみなすこともできよう。

2－1　イギリスにおけるチャリティ制度[8]

ボランタリー活動の利他的な意味合いをより強調したものがイギリスにおけるチャリティである。チャリティとは，目的として「貧困の救済」「教育の振興」「宗教の振興」「地域社会への利益貢献」という4つの公益性の少なくともひとつを持つと認められた非営利団体である。イギリスにはボランタリー団体は約50万団体，そのうち約27万団体がチャリティであり，約17万団体がチャリティ委員会という公的機関に登録されている。チャリティ委員会は政府から独立した権限を持つ公的機関で，チャリティの登録，チャリティへの助言，活動の監視を行っている。チャリティの資格を得られるとその団体は税制優遇を受けられるとともに，財団や基金から無償援助基金を得られる。また社会的な信頼が高まることにより一般市民からの寄付を受けやすくなる。規模が大きく知名度が高いチャリティには下記のようなものがある。

心臓病に対するキャンペーン British Heart Foundation
ホームレスや高齢者に対する活動 The Salvation Army
癌研究助成 Cancer Research Campaign , Imperial Cancer Research Fund
児童救済財団 Save the Children Fund
海外の貧しい人々の救済活動 Oxfam
海難救助 Royal National Lifeboat Institution
盲導犬の訓練や視覚障害者への盲導犬の提供 Guide Dogs for the Blind
高齢者のサポート Help the Aged

（Snapshot of the Voluntary Sector Today , 1992 NCVO）

前述のジーザス・アーミー（The Jesus Army ; The Jesus Fellowship Church）は「宗教の振興」を目的としたチャリティとして登録されている[9]。イスラム教，仏教，ヒンズー教，シーク教や新宗教は，同様に「宗教の振興」を目的としたチャリティとして登録される。

大学や大英博物館などチャリティ委員会への登録を免除された「登録免除チャリティ (Exempt Charities)」が存在し，これらは他の公的機関の監督下にある。また「登録対象外チャリティ (Excepted Charities)」も存在する。国教会や礼拝場所登録法 (the Places of Worship Registration Act 1855) のもとで登録されている団体（国教会以外のプロテスタント，カトリックやユダヤ教など）や永久的基本財産を有さず年間粗収入が1,000ポンド未満の組織などである[10]。

1989年チャリティに寄付した人は国民の74%，その額は1人平均15ポンド（当時のレートで約3,600円)。5割が何らかのかたちでボランタリー活動に関わり，費やす時間は週平均2.7時間。

1991年の調査では，過去一年間に少なくとも1回はボランタリー団体で活動をした人が成人人口の51%（2,300万人）。少なくとも月1回の定期的な活動は成人の31%で，22%の成人が毎週何らかの形でボランタリー活動に参加している。また団体を通さずに個人でやる活動を含めると一年間に何らかのボランタリー活動をした成人の割合は83%である。ボランタリー活動に参加するだけでなく，ボランタリー団体の運営に関する委員会にボランティアの36%が参加している。職業別にみると勤労者が66%，失業者5%，定年退職者14%，家事従事者11%であり，勤労者の参加者が多い(11)。

イギリスにおける社会政策の原則は民間団体に対する「Support but No Control」であり，民間団体は補助金などのサポートを求めるが，行政指導は期待していない。チャリティの主体性と自律性が重要視されている。しかし，一旦チャリティとして登録されれば永遠にその登録が残るというわけではなく，チャリティ法には様々な規定がなされている(12)。

2－2　イギリスにおけるチャリティの歴史

イギリスにおけるチャリティー組織の近代的概念は1601年のエリザベス女王の法令にはじまる。その公益法のリストには，高齢者や困窮者の救済，学校の保守，教会や道路の修理など公益性の目的が具体的に明記されていた。ピューリタン革命を目の当たりにしたHobbes(1588 - 1679)が，人間の生命や自由を保障できる近代的社会契約思想の原型を描いた「Leviathan，1651」を上梓し，封建的な身分制秩序や神学的思考から解放された国家を論じた17世紀中葉にボランティアという言葉が「自警団」の意味で流布し始める。

19世紀中葉より自由放任主義経済による産業構造下で中産市民階級と労働者階級との対立が激化，同時に都市化による社会問題も深刻化した。それにともない当時支配的思想であったBentham（1748－1832）らによる功利主義哲学は下火になり，国家の必要性をとく法思想が次第に主流となった。この時代，1853年公益信託法が制定，1860年チャリティ委員会設置，チャリティが制度的に整備され始める。そして，1891年になって公益性の4つの目的，すなわち「貧困の救済」「教育の振興」「宗教の振興」「地域社会への利益貢献」が定められる。この一連の流れは前述のGreen（1836－1882）による公共善の思想に合致する。

第一次世界大戦後の1919年，大戦で生じた社会的ニーズへの対処のために全国社会サービス協議会が設置される。第二次世界大戦後の1948年より労働党政権の下で福祉国家政策が進むが，1960年代になると社会福祉政策の偏りや非柔軟性，人間の尊厳を無視した行政が問題になる。経済的に余裕のある人や社会的強者が社会的弱者を助けるという従来のチャリティ・ボランタリー活動理念に転換が見られ，ホームレス，身体障害者，エスニック・マイノリティなどの地域社会の内発的なセルフヘルプ活動や相互扶助活動が盛んになる。

1979年サッチャー保守党政権樹立とともに福祉国家政策の全面的な見直しがなされ，公的事業の民営化促進とともに福祉予算が削減された。チャリティ・ボランタリー活動を社会福祉提供の中心に置き，政府は補完の役目を担い，個人が公共へ奉仕したいという気持ちを重要視するというのがサッチャー政権の基本方針であった。これにともない，さらにチャリティ・ボランタリー組織の重要性が増し，チャリティへの寄付に関する優遇税制措置がとられる。

1990年のメージャー保守党政権でもその方向性は継続され，コミュニティケア法の制定に続き，1992年1993年と現代社会に適したチャリティ法が整備された。1997年ブレア労働党政権誕生後，

チャリティのリサイクルショップに対する消費税課税問題などが浮上するが，大きな政策転換はなく現在に至っている。

2－3　チャリティショップ

多くのチャリティがリサイクルのチャリティショップを持っている。チャリティショップでは市民や企業が寄付した不要品や在庫である書籍，古着，レコード，CD，本，その他雑貨，骨董品などを売り，その収益をチャリティ基金や活動資金にしている。

オックスファム（OXFAM）というチャリティは全国的な組織を持つ団体で，発展途上国の貧困撲滅や災害で被害を受けた地域の援助を人種，宗教，政治体制を超えて世界約70の途上国で3万人以上がネットワークを組んでボランタリー活動をしている。オックスファムのチャリティショップはイギリス全国約850店，約1,200名の有給フルタイムスタッフとそれをはるかに上回る数のボランティアが働いている。筆者はそのひとつのショップでボランティアをしていた。週に一度，午後1時から閉店の6時までおもに書籍に値段をつけ，分野ごとに仕分けして棚に並べる。レジも引き受ける。閉店後に掃除や売り上げの計算などをして終わりである[13]。オックスファムのチャリティショップ経営には基本方針があり，非常に合理的に運営されている。レジでは品物を仕分けしてマーケットリサーチをし，そのリサーチ結果を反映して陳列商品のカテゴリーやスペースを変えたり，在庫の調節をしている[14]。

筆者自身ボランティアをしながら他のボランティアたちの動機が気になり，皆に動機を聞いて回った。このチャリティショップでは有給のフルタイムマネージャーのほか10人ほどのボランティアがボランタリー活動をしているが，そのうち利他的な動機をあげたのは4人。仕事を見つけるためにレジの使い方やショップでの働き方を習得しようとするボランティアのほか，履歴書のポイント稼ぎ，友達がいる，暇だからなどの回答があった[15]。

3．宗教と利他主義とボランティア

キリスト教はときに「愛の宗教」と呼ばれることもあるが，「良きサマリア人 The Good Samaritan」(Luke 10 : 30 - 35) が利他主義のモデルを提示している。また神への愛，家族や自分自身への愛は，隣人，敵，見知らぬ人にまで及ぼされる (Matthew 5 : 38 - 48 ; 22 : 36 - 40)。仏教においては慈悲の心が利他主義に通底し，特に大乗仏教で強調される。自分だけの悟りや救済を求めて修行する自利の信心ではなく，一切衆生に対する慈悲の心を持つ菩薩として利他行に徹することが説かれる。このような利他主義は多くの宗教に存在し，このような思想をテーマにした研究が多数存在する。神学や護教の立場から理想的な利他主義を描き出している研究も存在する。

社会学において宗教と利他主義の関係が研究対象として焦点をあてられるようになったのはSorokin後である。Sorokin(1950)は「いかにして人は利他的になるのか」に焦点をあてて，アメリカにおける善き隣人とカトリックの聖者たちが示す利他的性質に関する研究を行った。善き隣人は，ラジオ番組「ハリウッドで朝食を」の聴取者によって推薦され番組委員会によって選出された善人リストから抽出された平均以上に利他性と善隣性を備えた人，およびハーバード大学の大学院生・大学生と数名のソーシャル・ワーカーにより推薦された利他的な人である。選出された善き隣人に対して質問紙やインタビューによる調査が実施された。彼らの善隣性の要因として29%が親や家庭の躾けをあげ，28%が人間本性を，21%が宗教を，8%が学校教育をあげている。カト

リックの聖者はカトリック教会によって聖列に加えられた聖者であり，この世界の社会的・文化的特性が研究されている。キリスト教と利他主義の関係について1973年にアメリカで実施されたギャラップ調査はアメリカ市民1,502人を対象に実施され，「あなたは宗教的信念に従い，他者のために具体的な行動をどれくらい頻繁に起こしますか」という質問項目などを含んでいる。教会へのコミットメントは教会参加によって測られているが，教会へ通う人はそうでない人よりもより利他的であると分析されている(Langford & Langford 1974)。またNelso & Dynes(1976)は，教会への深いコミットメントが災害救援時における利他的行動と深い関連があることを実証的研究で明らかにした。しかし，現代社会が，あるいは対象とする社会が，日常よりも災害などの非日常において利他主義をより強調するような規範をもっているとするならば，そのような社会規範のもとでは利他主義を説く宗教の信者の利他的な実践は日常においてむしろ顕著化するはずである[16]。日常における宗教と利他主義の関係にこそ研究の目が向けられるべきであると筆者は考える。一方で，Cline & Richards(1965)はアメリカのソルト・レイクでインタビューによる調査を行い，利他的行動と宗教性は無関係であると結論している[17]。他にも同様の結論を導き出した研究が存在する(Darley & Baston 1973; Annis 1976: Smith et al. 1975)。方法論上の問題，調査が実施された地域の社会規範や社会状況など様々な要因が異なる結果をもたらしていると考えられる。

宗教性と利他的行動の関係についての様々な研究と，それによって導かれた異なる分析と解釈が存在するが，多くの宗教に共通して利他主義思想が存在することは疑いのない事実である。宗教により人がより利他的になるならば，如何にして，どのようなプロセスを経てそのようになるかが問題になる。未成人の場合，成長過程で社会化にともない利他的な人格が形成され，宗教とは直接関係がない可能性もある。宗教的影響よりも家族を含め様々な環境が要因で人をより利他的に形成しているとも考えられる。事例をもとにした利他主義と宗教の関係についての調査方法論考察については他日を期したい。

日本の現代宗教も社会の現状に応答し，福祉活動など社会に向けた利他主義を実践している。日本の新宗教の多くは社会道徳を重んじ，個人的修養を説いてきた。そして，時代の変化にともない個人的な修養は社会的なコンテクストで説かれるようになった。ロバート・キサラ(1992)は，「他者の幸福に関心を持ち，救済活動や福祉活動を行う新宗教集団もあるという事実は興味深い。個人の修養を越えて，他者に対する積極的な関心・行動を要求する普遍的愛他主義の主張が新宗教のうちにみられる」と指摘している[18]。1995年1月17日の阪神淡路大震災の直後から，多くの宗教団体が緊急支援のボランタリー活動を展開した。宗教性や教団色を薄めてのボランタリー活動に賛否両論はあるが，多くの教団が迅速かつ積極的にボランタリー活動を行ったことが記録からもうかがえる（国際宗教研究所編 1996)。

前述したようにジーザス・アーミー[19]はホームレスに食事をサービスするというようなボランタリー活動を行っている。信者の皆が行うのではなく，希望者が参加している。ボランティアである。彼らのそのような活動に対してリクルートのためであるという批判が存在する。実際にホームレスから信者になった人もいる。アルコール中毒や麻薬中毒だった人も現在信者として宗教活動をしている。むしろ，生きる活力を失い路頭に迷っていた彼らを救済していると言えよう。しかし，彼らの活動は信仰にもとづいた純粋な利他愛のあらわれであろうか。彼らに同行した時に，

比較的若くて健常そうなホームレスを選んで声をかけているように見受けられた。集団の利害意識と宗教理念の相克を感じた。しかし，コミュニティハウスに住む43歳の男性信者リアム[20]はいう。「僕らの生活は教会の理念に深くコミットしたものだから，それと無関係のことをする時間はない。」リアムがこの教団の信者になってから20年以上も経っている。コミュニティで共同生活をはじめる前は中学校の教師であった。その当時は学校関連のチャリティ募金運動などもやっていた彼だが，現在は時間がないという。リアムは利他主義を「人に利益を施す活動。人にとって何か良いことをする活動」と解釈している。そして，自分自身を「人文主義的な利他主義ではなくて，キリスト教徒としての利他主義という意味」において利他的であると思っている。「キリスト教は利他的だと思う。しかし，センチメンタルな意味でも人文主義的な意味でもないよ。」リアムはキリスト教的利他主義と人文主義的利他主義を区別して考える。「利他的な行動をするのは，人の為になるからということだけではない。僕は人を助けることによって神の栄光を見たいんだ。人文主義的利他主義って善行を施すこと自体が目的になってしまうことがある。しばしば自己満足にね。」彼は人文主義的利他主義の陥る危険性を指摘するとともに，神の栄光への奉仕を語る。それは心理的な欲求を満たすためでも，趣味でもない。彼の利他的行動は神に協力することを意味している。彼の宗教的理念によれば，集団としての利害意識と結び付けて考えられる教団の拡大も神の栄光の顕現と解釈することが可能である。

リアムはこの教団の信者になってから変わったのだろうか。「聖書はすべての人に善行を施せと説いている」と彼は言う。「僕はすべての人に施しをする心を持っている。僕らが何年にもわたって助けてきたアルコール中毒者や麻薬中毒者の数はすごいもんだよ。どこにも行くところがなくて，誰かにそばにいて欲しい，そんな彼らをね。今ではそういった彼らに対して，ますます心を開いて接することができる。昔の僕だったら考えられないことだけれど。」リアムは彼らを救っていくことが「自分たちの生活，奉仕」の重要な一部と考えている。彼のモデルはイエスである。「ジーザスが僕にしてくれたことを僕は人にする。人に仕えることだ。」彼の利他的な行動は人びとに実際的な面で仕えるだけでなく，「スピリチュアルな面」でも仕えることだとリアムは付け加える。「彼らに食べ物を施し，寝る場所を与える。僕らはそういったことをする。でもリアリスティックにならないといけない。もし彼らが神を求める心が本当にないなら，その時には彼ら自身に選択してもらわないと。」それにもかかわらず，「僕らはどんな人に対しても救いの手を差し伸べる心を開いている。20年前の僕だったら決してできないことだ」と彼は回想した。

44歳のレイチェル（仮称）は，The Friends of the Western Buddhist Order (FWBO)[21]の信者として10年目をむかえた。ロンドンでほかの信者と共同生活を送っている。得度をしてフルタイムの信者である彼女は，ロンドン大学キングズカレッジの大学病院にあるエイズ患者のクリニック内と国立病院のスタッフに対してメディテイションを教えるボランタリー活動を行っている。「メディテイションを仏教センターの外で活かすことにずうっと関心があった」と彼女は言う。FWBOでの信仰生活がレイチェルを利他的に変えたのであろうか。FWBOで信仰をはじめる前，レイチェルはロンドンの地域健康促進計画のコミュニティワーカーとして働いていた。「人生においてわたしは何をしたら良いかって考えた時に，すでにわかっていたわ。オフィスでお金のためだけに仕事をすることに私は満足しないってことが」と彼女は20代の頃を回想する。彼女にとって「社会や地域社会の福祉に貢献すること」が重要であった。しかし，コミュニティワー

カーとしての生活は「ストレスが非常に多かった。」彼女はそのストレス解消にメディテイションが良いのではないかと思い，FWBOのメディテイションクラスに参加した。レイチェルは，彼女が求めてきた「社会や地域社会の福祉に貢献すること」ができる安定した場所をFWBOに見い出したのである。コミュニティワーカーをやめフルタイムの信者になった彼女が，ボランタリー活動を行ない，別の形で「社会や地域社会の福祉に貢献すること」は自然なことであった。

レイチェルは利他主義を「ひとの立場になること」と定義する。「自分の事だけを考えるのではなくて，他のひとびとのニーズに気がついていくこと」と彼女は言う。「ひとに対してオープンになり，そしてひとのことを気にかけてゆくことで，自分自身がゆったりでき，自分を解放でき，苦しさがなくなる。このことによりハッキリと気付いたの」とレイチェルは利他主義の恩恵を認める。「自分の事ばかり考えているって非常に苦しい状態だものね。」

ふたりのインタビューは非常に対照的である。利他的行動が神への奉仕であり，心理的な欲求を満たすためのものでないどころか，神に仕えるものとしての試練でさえあり得ると考えるリアム。一方，利他的行動が自己の解放で喜びにもつながると思索的に捉えるレイチェル。宗教性以外の諸要因を別として，この相違にはキリスト教思想と仏教思想の相違が強く反映されていると考えられる。

比較的若く健常そうなホームレスを選んで声をかけていて，あらたなメンバー獲得のためとも思えるジーザス・アーミーの活動は，集団の利害意識があるとしても，リアムにとっては神の栄光を顕現するための「キリスト教的利他主義」である。聖書にもとづきイエスをモデルとして生活するリアムの「キリスト教的利他主義」は「人文主義的利他主義」とは峻別される。リアムは，聖書（Matthew 5: 38-48; 22: 36-40）にしめされる普遍的愛にもとづき，どんな人に対しても心を開くように実践しているが，リアムの利他主義の実践は善行を施すこと自体が目的ではない。リアムの利他主義は神の栄光への協力であり，イエスをモデルとした奉仕生活の一部である。自己満足どころか，ときには試練とさえ感じられる「キリスト教的利他主義」の実践は，物質的・実際的な施しだけではなく，むしろ「スピリチュアルな面」での施しが重要になる。そして，最終的なところで「神のみ声」に耳を傾ける人とそうでない人という境界を引いている。リアムの利他主義においては，利他的行動の対象である他者との関係は神を通して理解される。リアムの利他主義は，信仰に目覚めていない他者，神の声を未だ聞いていない他者に対する神の栄光を顕現するための働きかけと理解できよう。

一方，レイチェルの利他主義は「ひとの立場になること」を強調する。利他的行動の対象である他者との関係は，リアムの「キリスト教的利他主義」と比較してより直接的で，リアムのような信仰における使命を背負った行動という面は希薄である。レイチェルは，彼女自身の生い立ちやFWBOで信仰をはじめる以前からもっていた社会に対する貢献というパトスを気負いなく実践している。彼女の利他的実践は，仏教における慈悲の心という側面に増して，執着心から生じる苦からの解放という側面に価値が置かれている。また，レイチェルは因縁思想を信じているが，利他主義に関してはその思想はあまり影響していない。利他主義の恩恵を仏教思想にもとづいて解釈するレイチェルにとって大切なことは，自分自身のことだけを考える状態から他者の立場になって他者を気にかけていくことによって，自分自身が執われた苦の状態から解放されていく，他を救うことによって自らも救われるということである。レイチェルは，仏教思想にもとづいて

自らのこころの状態を思惟し，思索的に利他主義を捉えていると理解できよう。

まとめ

阪神淡路大震災において，宗教とは無関係のNGOでのボランタリー活動を通して筆者が感じたことは，宗教団体のボランティアに比べて個々のボランティアが傷つきやすい状況にあるということであった。参加動機は様々であるし，必ずしも利他的とは言えず，人間関係でいきづまってやめていった人，子供のカウンセリングを行っていくうちに自己の問題が強く認識され活動を続けられないほど押し込めていた心の傷を再開示してしまった人，気を張りがんばり過ぎて倒れてしまった人などたくさんの問題があった。金子郁容(1992：103-106)はこのような問題をボランティアにおける「自発性のパラドックス」と呼んでいる。「自発性のパラドックス」とは，自らの自由意志で進んでとった行動の結果として，その自分自身が苦しい傷つきやすい立場に置かれることである。偽善的と言われたり，他者を思いやり行動した結果トラブルに巻き込まれたり，「言い出しっぺが損をする」「わりをくう」羽目に陥り，他者を思いやった自らの行いを自問自答するような「つらい」立場に置かれる。環境問題などにおいては，ボランタリー活動に参加して問題意識が深まり，「自分自身も地球環境を破壊しながら生きている」ということを認識し，そのために強い自己反省からかえって「無力感」「焦燥感」に苛まれる可能性もある。まわりから「偽善的だ」などと言われて引っ込んでしまう人もいる。また理想と現実の乖離に悩まされる人も多い。

ボランティアであるということは，喧伝されるような自己実現や生活の充実という面だけでなく，上記のような潜在的に傷つきやすい面を内包している。であるからこそ個々のボランティアに対するサポート体制が大切なのである。そのサポートはボランティア保険などの制度的サポートや技術的なサポートだけでなく，精神的なサポートも重要である。その面で宗教団体のボランタリー活動は特徴的である。宗教と関係のないボランタリー団体においても専門的なカウンセリングやボランティア同士の支え合う精神的なサポートが存在するが，宗教団体のボランタリー活動においては，宗教が与える世界観と信仰というバックボーンがボランタリー活動における個々のボランティアの精神的支えになっている。世界観・信仰を共有するボランティア同士のつながりも重要な精神的支えとなる。単なる理念や観念ではなく，信仰を基盤とした利他主義の実践としてのボランタリー活動は，ときにはそれが信仰生活の一部であったり，修行の一環と捉えられる。多くの宗教において説教や信者の体験談を通して利他的実践の尊さや宗教的意味合いが説かれるが，その宗教が与える世界観や信仰がボランティアの「自発性のパラドックス」を乗り越える原動力となっていると考えられよう。それは教義や理念ではなく，教会，神社，寺院，教団での日常的な奉仕活動という実践があればこそ可能となるのではないだろうか。また災害救援時には他のボランタリー組織に専門性において軍配が上がるかもしれないが，他の団体との協力や情報交流により宗教団体のボランタリー活動も技術的サポート体制が充実してきている。特に人の動員力や組織力で強みを持っている。そして，他のボランタリー団体の手が届かない，あるいは嫌がる避難所のトイレ清掃などの地道な活動も特徴的である。これらは日常的な清掃などの奉仕活動や利他的実践の延長線上にあると考えられる（国際宗教研究所編 1996：159)。

宗教団体におけるボランタリー活動と，個々の信者が外部のボランタリー組織で行なうボランタリー活動，さらには宗教を持たない人のボランタリー活動では，その自発性において根本的に

異なると考えることも可能である。ジーザス・アーミーやFWBOでの参与観察やインタビューからは，宗教団体のボランタリー活動において強制や周りからの目に見えない圧力は感じられなかった。奉仕活動は修行の一環として別の宗教的意味合いをもっているであろうが，ボランタリー活動に関しては，背後の思想として宗教的意味付けがあっても，自発的なまさにボランティアとして参加していると考えられる。しかし，宗教団体のボランタリー活動を論じる時，宗教団体においてはボランタリー活動がお膳立てされているという指摘は欧米ではあてはまらないが，日本の特殊事情に鑑みると的を射た指摘である。1993年11月の総理府の調査によると，ボランタリー活動をはじめたきっかけとしては，「学校，地域，職場，団体などで参加する機会を与えられて」が6割近く，「自発的な意志」は2割弱である。この結果は，日本人の集団主義的発想のあらわれと解釈するよりも，自発的な個人の意志が活かされる社会的状況が整っていないことを示唆していると捉えるべきである(22)。欧米社会ではボランタリー制度やチャリティ制度が整備され，社会的にボランタリー活動がお膳立てされているのである。すぐに誰もが活動に参加できるように情報と場所が提供されている(23)。たとえ一週間に2時間程度，月に1回であってもボランタリー活動に簡単に参加できるのである。このような社会では，宗教団体と一般社会のボランタリー活動のお膳立てに関しての議論などは存在し得ない。それほどまでにボランタリー活動やチャリティが社会に根付いているのである。

環境汚染・ゴミ公害・飢餓・紛争・高齢福祉・ホームレス・アルコールや麻薬中毒など様々な問題を抱える現代社会にあって，「何とかしなければ」という社会意識を持つ人々は増えている。ところが，社会問題に関心をもち，「何とかしなければ」と思ったとしても，「どうしたら良いかわからない」「自分一人では何もできない」と結局無力感に苛まれてしまう。そのような人々の積極的な行動への橋渡しの役目をチャリティやボランタリー団体は担っている。政治・経済・国家・組織というような複雑な強大システムの中で，他者や社会に貢献しているという確かなリアリティーを獲得する機会を与えている。先に述べたように，チャリティやボランタリー活動の根底には，個人的な自発性や主体性による行為が競争ではなく連帯を生むという利他的な公共善の考え方が強く存在しているのである。しかし，宗教者のボランタリー活動では，公共への奉仕が神への奉仕であったり，公共への奉仕を通じて人格の完成に至るという考えが宗教的理念によって思索的に捉えられたり，公共善という人格の陶冶が修行の一環であると解釈されたりする。一般のボランティアにおける利他的行動の源泉としての社会規範への志向性は，宗教者のボランティアの場合には宗教的世界観への志向性，あるいは宗教的理念への志向性と考えられる。無論これは宗教へのコミットメントの強さによって相違が出てくるであろう。その調査方法を含めて，事例をもとにしたさらなる研究が待たれる。

困難な状況にある人への共感や感情移入が利他的行動の動機であるという仮説 the empathy-altruism hypothesis は，一般のボランティア同様に宗教者のボランティアにもあてはまるとインタビューや参与観察を通して感じられた。しかし，宗教的世界観や思想が宗教者の利他主義やボランタリー活動を根底で支えている。宗教的世界観を共有したメンバーによって構成されるボランタリー組織は，そのような宗教的世界観を共有しない人には奇異に感じられ，そのことが閉鎖的な感覚を与える可能性もある。また強い宗教的信念から独善的なボランタリー活動になり，相手の側に立った利他的な反省がなされない危険性も内包している。一方で，救世軍 The Salvation Army のよ

うにキリスト教団体としてよりもホームレスや高齢者のために活動をしているチャリティとして社会認識されている宗教団体も存在する。社会性が増し，宗教性が希薄になるという別の問題が存在するが，利他的なボランタリー活動が一教団としての排他性や閉鎖性を乗り越えて教団外部の人に利他的な倫理観を伝えていく可能性を宗教的ボランタリー活動がもっていることを否定することはできないであろう。その際，リアムやレイチェルの例に見られるように，その宗教性によって異なる利他主義が他者や社会に与える影響についての研究も重要なテーマになってくる。ボランタリー活動を実践し，信者とともに行動する体験的調査，「自ら生きてみた経験」「ともに生きてみる経験」[24]にもとづき考察を進めている筆者は，上記のテーマとその調査方法論を今後の課題として取り組むことを自らの肝に銘じている。

註

(1) ここでの利他主義の検討は，拙稿(1998)をもとにしている。

(2) フランス語 altruisme。ラテン語の alteri huic(to this other)が語源。

(3) インタビューをもとにした現代アメリカ人の利他主義研究として以下を参照されたい。
Robert Wuthnow (1991) *Acts of Compassion: Caring for Others and Helping Ourselves.* Princeton: Princeton University Press.

(4) 生物学的アプローチによる利他主義の研究は，Darwin (1809 - 1882) 以来，Haldane (1932), Wynne-Edwards (1962) ら多くの学者によってなされてきたが，最近では Mark Ridley や Richard Dawkins が取り組んでいる (cf. Rushton & Sorrentino 1981)。

(5) パソコンネットワークを通して結成した「子供のケアのためのＮＧＯ（『楽楽』）」。始動当初，私を含めてお互いがまったく知らない５人の組織だったが，神戸市灘区六甲学院の校長先生のご厚意で学院内に本部を設置，姫路工業大学の教育心理の先生をはじめとして20名ほどが泊まり込み，避難所などにおける子供のケアを行なった。パソコンネットを通しての呼びかけと新聞に掲載されたことにより３月には後方支援を含めて80名以上のボランティアが参加，全国からワゴン車，パソコン，ＦＡＸなどの提供や義捐金が集まった。

(6) Gerge Feaver & Frederic Rosen (ed.), 1987, *Lives, Liberties and the Public Good* を参照されたい。

(7) 公共善に関連して福祉に関する社会の構成を４つのセクターにわけて捉えると，親族や人などの Informal Sector, 国や地方自治体 Public Sector, 福祉を提供する営利業者 Private Sector, 非営利の Voluntary Sector と分類できる。

(8) イギリスのチャリティ制度，チャリティの歴史については下記を参照した。
HMSO, 1989, *Charities: A Framework For The Future*
HMSO, 1993, *Charities Act 1993*
National Council for Voluntary Organisations, 1995, *The Charities Acts* 1992 *and 1993*
National Council for Voluntary Organisations, 1996, *Meeting the challenge of change*
Harold J. Schultz, 1968, *History of England*
W.H.Greenleaf, 1988, *The British Political Tradition*
Gerge Feaver & Frederic Rosen (ed.), 1987, *Lives, Liberties and the Public Good*

(9) サイエントロジーはチャリティ申請を提出したが認められていない。1998年11月現在，再審議中である。

(10) 日本国立国会図書館で作成された『調査と情報第275号，欧米の宗教団体法制』には，登録免除チャリ

ティ (Exempt Charities) と登録対象外チャリティ (Excepted Charities) の混同がみられる。

(11) The Volunteer Centre UK, 1992, *The 1991 National Survey of Voluntary Activity in the UK*

(12) たとえば，すべてのチャリティの理事が経理記録を保存するという義務を負っている。少なくとも6年間記録を保存しなければならない（チャリティ法セクション19,20)。チャリティの理事はその年度の活動に関して年次報告書を作成する義務を負っている（セクション23)。市民はチャリティの理事に対して経理記録の写しを請求することができる（セクション25)。

(13) このチャリティショップは1日の平均売り上げが400ポンド（約9万円）ほどであるが，1998年の7月24日，たまたま筆者がボランティアをしていた日に700ポンド（約16万円）を売り上げた。これらの売り上げを銀行へ預金に行くのもボランティアが行う。なお，ボランティアは交通費が支給される。朝から1日ボランティアをした場合には昼食代（日本円にして400円ほど）も支給される。

(14) 陳列されているのは6～7割であり，のこりは作業室に保管されている。また地域毎に特色があり，値段や商品の質が異なる場合もある。ある店で売れないものは他の店へまわされる。書籍は値付けして陳列する時に，週毎に異なる色の小さなシールを背表紙につける。4～6週間で売れないものは他店へ回される。

(15) チャリティショップで活動するボランティアの意識や宗教的背景に関して信頼できる調査は現在のところ存在しない。筆者は調査を計画中である。

(16) ここでいう顕著化とは利他的な行動が社会現象として目立つ形態をとるという意味ではない。宗教者と非宗教者の利他的な実践の相違が，非日常生活よりも日常生活においてよりはっきりとした形であらわれるという意味である。

(17) 調査地域の宗教構成は，モルモン72％，プロテスタント9％，カトリック4％となっている。宗教性は教会参加，祈りの回数，献金による。

(18) しかし，新宗教の利他主義を正面から論じたものは現在でも数えるほどしか存在しない (島薗 1992，キサラ 1992，稲場 1998)。理論面では，近代日本人の道徳意識「和合倫理」の構造と新宗教の道徳意識について論じられている (島薗 1992) を特に参照されたい。

(19) バプティスト教会の牧師だったイギリス人 Noel Stanton が1969年にロンドンから電車で北に2時間ほど行った Northampton で始めた宗教運動 The Jesus Fellowship Church。1987年より The Jesus Army という名称を用いて，街頭での積極的な福音伝道活動を開始。信者数は約2,500名で，ロンドンを含めてイギリス各地に約50のコミュニティハウスが存在し，子供を含めると約550名が共同体生活をしている。コミュニティハウスでは聖書にもとづいた簡素な生活が重視され，ＴＶはなく，共同生活者は財産をすべて教団に寄付する。農場経営などの教団ビジネスや外の仕事で得た収入も教団に入る。大きなイベントでは照明効果を用いてロック調の音楽で宗教的メッセージが伝道される。激しく踊り，異言を発する。

(20) 仮称。筆者はこの教団に対して，参与観察，インタビュー，ロンドンのコミュニティにおける全数質問紙調査を実施している。彼らと一緒に日曜日の午前礼拝に参加したり，彼らのコミュニティで食事をともにし，皿洗いもしている。日本人ということで差別されたわけではないが，彼らに受け入れられるまで努力を要した。夜の礼拝までの空き時間には信者に対してインタビューを行なっている。紙数の関係上，これらについては稿を改めて詳しく論じたい。

(21) FWBO はイギリス人 Denis Lingewood（のちにサンスクリット名 Sangharakshita）が1967年にイギリスではじめた仏教運動である。750名が得度して深いコミットメントをもっている。多少のコミットメントをもった信者は2,500名ほど。イギリス各地の仏教センターが独立したチェリティとして登録されいる。瞑想教室を開き，健康食品やギフトショップなどのビジネスも営んでいる。どの宗派にも属さず，チベット仏教，密教，禅，大乗仏教など様々なものを取りこんで西欧社会に適した形で修行している。ジーザス・アーミー同様に筆者はこの教団でもリサーチを行っているが，これについても別稿で

詳しく論じたい。

(22) 同調査で，8割以上の青少年がボランタリー活動に参加する意志を持っているものの活動している人は5%にとどまっている。ボランタリー活動に参加したことがない人の理由として，「時間がない」という回答のほかに，「きっかけや情報がない」「一緒にやる仲間がいない」「どうしたら良いかわからない」というような回答が多数存在する(cf．東京ボランティア・センター 1995『ボランタリー活動の考え方・推進のあり方について』)。

(23) たとえば，新聞紙 *The Guardian* には水曜日に隔週で数ページに渡りボランティア募集広告が掲載される。新聞紙・雑誌・タバコなどを売っているお店（ニュースエイジェントと呼ばれる）では，店頭にボランティア募集の張り紙がある。地域の図書館，教会，コミュニティセンターなどにも広告がある。多くのお店のレジにチャリティの募金箱があり，スーパーマーケットや駅の改札では募金をお願いするボランティアがビラも同時に配っている。テレビやラジオではチャリティが広告を頻繁におこない，自宅には寄付金願いのダイレクト・メールがボランティア情報とともに送られてくる。居住エリアのショッピング・ストリートにはたいてい2，3のチャリティショップが存在し，ボランティアを募集している。また，学校ではボランタリー活動の早期教育が行われている。たとえば，Sponsored Walk は，1マイル歩く毎に何ポンド，完走したら何ポンドと寄付金を家族や友人にお願いし，そのお金はマラソンや競歩大会の後援になっているチャリティに寄付される。また，老人ホームや病院へのヘルパーとしてのボランタリー活動も中学生時代からはじまる。1996年より日本の市民フォーラム21がチャリティ制度やボランタリー活動を学びに毎年イギリスを訪問している。日本でもボランティア・センターやインターネットを利用したボランティア情報が近年整備されてきてはいるが，上記のような一般の人が手軽に日常的にふれられるボランティアの情報提供とボランタリー活動の場の提供はこれからである。

(24) これらの言葉は島薗進教授から頂いた。頂いた様々なコメントに感謝申し上げる。

参考文献

Annis, L. V. (1976) "Emergency helping and religious behavior", in *Psychological Reports,* 39, 151-158.

Batson, C. Daniel. 1991 *The Altruism Question: Toward a Social-Psychological Answer.* New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Cline, V.B. & J. M. Richards Jr (1965) "A factor-Analytic Study of Religious Belief and Behavior", in Journal of *Personality and Social Psychology,* 1(6), 569-578.

Comte, August. 1875 *System of positive polity (Vol. I).* London: Longmans, Green & Co. (Original 1851)

Darley, J. M. & C. D. Batson (1973) "From Jerusalem to Jericho: A study of situational and dispositional variables in helping behavior", in *Journal of Personality and Social Psychology,* 27, 100-108.

Langford, Barbara Johnson & Charles C. Langford. 1974 "Review of the Polls: Church Attendance and Self-Perceived Altruism", in *Journal for the Scientific Study of Religion* 13(2): 221-222.

Macaulay, J. R. & L. Berkowitz (eds). 1970 *Altruism and Helping Behavior: Social Psychological Studies of some antecedents and consequences.* New York: Academic Press.

Montada, Leo & Hans Werner Bierhoff. 1991 "Studying Prosocial Behavior in Social Systems." In Leo Montada & Hans Werner Bierhoff (eds), *Altruism in Social Systems,* New York: Hogrefe & Huber Publishers, pp. 1-26.

Nagel, Thomas. 1970 *The Possibility of Altruism.* Princeton: Princeton University Press.

Neal, Marie Augusta. 1982 "Commitment to Altruism in Sociological Analysis", in *Sociological Analysis* 43(1): 1-22.

Nelson, L. D. & Russell R. Dynes (1976) "The Impact of Devotionalism and Attendance on Ordinary and Emergency Helping Behavior", in *Journal for the Scientific Study of Religion,* 15 (1), 47-59.

Rushton, J. Philippe & Richard M. Sorrentino (eds). 1981 *Altruism and Helping Behavior: Social, Personality, and Developmental Perspectives.* New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Rushton, J. Philippe. 1980 *Altruism, Socialization, and Society.* New Jersey: Englewood Cliffs.

Sorokin, Pitirim A. 1950 *Altruistic Love: A Study of American "Good Neighbors" and Christian Saints.* Boston: The Beacon Press.

Smith, R. E. et al. (1975) "Faith without works: Jesus people, resistance to temptation, and altruism", in *Journal of Applied Social Psychology,* 5, 320-330.

Wispe, Lauren (ed.). 1978 *Altruism, Sympathy, and Helping: Psychological and Sociological principles.* New York: Academic Press.

稲場圭信 1998「現代宗教の利他主義と利他行ネットワーク」『宗教と社会』VOL.4: pp..153-179。

金子郁容 1992『ボランティア ―― もうひとつの情報社会』岩波書店。

国際宗教研究所編 1996 『阪神大震災と宗教』東方出版。

島薗進編 1992『救いと徳』弘文堂。

ロバート・キサラ 1992『現代宗教と社会倫理』青弓社。

（筆者は1996年5月よりロンドン大学キングズカレッジ大学院でピーター・クラーク教授のもと，現代宗教の利他主義研究を行なっている。また1997年より文部省文化庁文化部宗務課の海外宗教事情調査の一環で，金井新二教授のアシスタントとしてイギリスの宗教やチャリティについてのリサーチに参加させて頂いている。本稿はそれらの研究成果の一部である。）

Altruism, Voluntary Activities and Religion: Charities in the United Kingdom

Keishin INABA

This article will deal with the correlation between voluntary activities and religion in terms of altruism. In the United Kingdom there are over five-hundred thousand voluntary organizations, and among them about 170,000 are registered charities. The charitable purposes of these organizations are altruistic and classified under four headings: the relief of poverty, the advancement of education, the advancement of religion, and other purposes beneficial to the community. Although it received only indirect mention in the preamble of the Statute of Elizabeth I (the Charitable Uses Act 1601),the advancement of religion has always been considered a charitable object. Indeed, the very concept of charity is essentially religious in origin. Thus, charitable activities and religions have traditionally been strongly related.

After surveying the literature on altruism, we shall consider the social dimension of these voluntary activities and their significance. There after we shall take a general view of the system of charities in the United Kingdom and its history. In the rest of the article, we shall discuss the correlation between religions and voluntary activities in terms of altruism from various standpoints. The discussion will refer to the meanings of altruism and charitable activities to religious people. Finally, this article will illustrate the differences and affinities between voluntary activities of religious people and those of non-religious people.